『蘭学事始』は全国の識者に知れわたったのである。専斎のかくれたる大功績であって、これは忘れてはならぬことである。

紙数がつきた。専斎が口にしたといわれる〝十九年の頓坐〟、つまり明治十六年以降の民権圧迫を核とする改革政策に対する専斎の意見について、残念ながら本著にはほとんど叙述されていない。当時の専斎がもっとも良質と考えていた「フランスの地方行政制度」、それの導入に基づく衛生業務の改正構想にふれてもらいたかった。これはないものねだりであろうか。

それはともかく、長与専斎の伝記、明治医制史の入門書として本著は役立つと思う。若き学徒に熟読をお願いしたい。

（中西　淳朗）

〔思文閣出版、京都市左京区田中関田町二―七、電話〇七五―七五一―一七八一、二〇〇二年六月、四六判、二〇〇頁、定価本体二〇〇〇円＋税〕

## 編集後記

四十八巻四号をお届けする。会員諸氏におかれては、新潟での歯科医史学会との合同総会を終えたばかり。すぐに来年福岡総会の抄録提出というペースで、せわしなかったことと拝察している▼総会は学会の一大行事であり、つつがなく開催するのが、いかに大変なことかはご存じのとおり。それゆえ開催地と会場の都合が最優先で、今回のように総会の半年後に翌年の総会となってしまうことがあるのはいたしかたない▼もう一つの柱は学会誌であり、高水準の維持と順調な発行が編集委員会の責務である。これは掲載論文に関する諸事のみならず、ページ数・刊行費など相当に些細な点にも及ぶ。それらについては編集委員が順次担当する当欄で、毎号お伝えすべきことを記してきた▼先々号で町委員も言及したが、これまで続いてきた本誌刊行への科学研究費補助金が今年度は出ないことになった。いつになったら再び交付されるかも分からず、日本学術振興会に毎年申請し続けるしかない。まことに困った状態になってしまった▼科研費の交付には、年度内刊行総ページ数の制限、および欧文論文ページ比率等の条件があり、指示は年々厳格になっている。それで最近は和文論文の投稿が増加傾向にあるのに、一定比率の欧文論文を掲載しなければならなかった。ために、審査を経て受理された和文論文の掲載が遅れた場合もないではない▼ならば科研費補助のない今こそ総ページ数の心配なく、受理された論文を迅速に掲載すべきだろう。だが、それは発行費増に直結し、助成がなくなった学会の台所をさらに苦しめる。まさしく矛盾そのものだが、会員諸氏のお知恵をいただき、斯学の発展に寄与したいと思う。

（真柳　誠）